川村学園女子大学研究紀要　第15巻　第1号　13頁—41頁　2004年

古代の城塞都市

伊　東　好次郎*

The Ancient Temple-Citadels

Kojiro ITO

Abstract

The Tigris flows on the east side and the Euphrates flows on the west side of Mesopotamia from the north to the south. Mesopotamia is a long flat land between these two big rivers. In the early times of the ancient history the oriental civilization developed and Christianity rooted deep in this area. Countries such as Babylonia, Assyria and Neo-Babylonia rose and fell one after another vieing with each other for power and land. The land is flat in Mesopotamia, so they founded the fortified cities in the wide expanse of plain. People built temples for their gods and goddesses and tombs for their kings in the centres of their cities. They enclosed their cities with high and thick walls against their enemies, especially putting stress on height. Their cities that were founded regularly on the square or oblong ground plan looked austere and stern. They were called the temple-citadels in Mesopotamia and Egypt. Their ruins have still remained. In upper and lower Egypt this type of temple-citadels developed as the trading as well as worshipping centres on the banks of the Nile.

In Greece another type of temple-citadels developed under the influence of Asia Minor through the Aegean isles. As Greece is a mountainous country, the Greeks could not use the same ground plan as the people in Mesopotamia and Egypt. The new type of temple-citadels was first built at the high top of the rocky hill on the semi-circular ground plan by the clever employment of its location in Mycenae of the Peloponnesian Peninsula. This type of the temple-citadel was called 'acropolis' in Greece. Next another acropolis was built on the same ground plan in Tiryns near Mycenae. Then acropolises were reproduced in Athens and other places in Greek mainland. By the development of the acropolises in Greece, a new and more active defence system replaced the old passive methods of defence employed in the ancient Mesopotamia and Egypt.

Key words: Mesopotamia—Temple-citadel—Asia Minor—Greece—Acropolis

*元教授　英文学

伊　東　好次郎

メソポタミアの城塞都市

ノルマン人によって征服されるまで，イギリスには城は殆んどなかった。イギリスの主要都市，特に南部のテムズ河や，東北部のタイン河（the Tyne）沿いの市や町は，八世紀終り頃から始まったヴァイキングの襲撃に備えて，住民達が共同して彼らの住居地の周辺全体に土の防壁を築き，その外側に木の防柵を張り巡していた。厳重に城塞化されたこのような市や町は，アングロ・サクソン時代には，バーグ（burg or burgh）と呼ばれた城塞都市だった。イギリスで大々的に城作りが始まったのは，ノルマンディー公国君主のウィリアム公が約7000人の軍勢と軍馬2000頭を率いてドーヴァー海峡を渡り，1066年10月，ヘースティングズの決戦でイギリス国王ハロルドを破り，イギリス征服に本格的に着手した11世紀後半ばからだった。[1] それまで，イギリスには，エドウォード證誓王に政治顧問として招かれて，イギリスに来たノルマンディー貴族達の中の者が，与えられた領地内に作った城が幾つかあっただけだったから，当時のイギリス人の大部分は城（Castle, Castero）と，いう言葉を知らず，城を見た事がない者ばかりだった。

軍事施設に関して，このように，イギリスはまだ未発達の状態だったが，文明が早くから発達していた小アジア（Asia Minor），メソポタミア（Mesopotamia），エジプト，ギリシアでは，各地域にまず原始的な集落社会が生まれ，これらの集落が統合されて，組織的な国家が有史以前から発達していた。それぞれの国々は自国の利益と領土拡大を求めて競い合い，国家間の対立抗争が絶え間なく続いた。各国の最大攻撃目標となったのは，国家の政治，経済，宗教，文化，産業等の活動の中心になっていた都だった。各国は敵の攻撃に備えて，都を強固な城塞都市（fortified city）に作り上げた。ギリシアのように岩山の多い国では，自然の地形を利用して，岩山の頂上に作られたアクロポリス（Acropolis）と呼ばれた高丘城塞都市が発達した。

また，メソポタミアは東側をティグリス（the Tigris），西側をユーフラテス（the Euphrates）の両大河に挟まれた，南北に細長く伸びている乾燥した平坦な平原地帯になっている。こうした平坦な地形なので，敵が侵入出来ないように，まず高さに重点を置いて，高い厚い頑丈な防壁を都の周囲に，張り巡らす必要があった。石材は余り利用出来なかったが，この地帯特有の粘土は無尽蔵にあった。メソポタミア地方の国々は，この粘土をこねて，強い天日にさらして固めた煉瓦を建材にして，土台の上に積み重ねた煉瓦を瀝青（アスファルト）で接着して，都の周囲一面に続いている長い，厚い，高い堅固な防壁を一重，二重に築いた。[2]

この防壁作りの建材を使って，バベルの塔建設作業に取りかかった描写が「創世記」の中にある。ノア（Noah）の子孫のニムロッド（Nimrod）は，彼と一緒に新らしい地に到着した

人々とともに，バベルという王国を創設した。次に，彼らがバベルの塔建設に取りかかった様子が，次のように描かれている。――「彼らは互いに言った。さあ，煉瓦を作ろう。＜天日で＞煉瓦をよく焼きあげよう，と。彼らは煉瓦を焼いて石の代りにし，粘土をこねてモルタルの代りに使った。そして，彼らはこう言った。さあ，みんなで都を作ろう。それに頂上が天に届く塔もね。＜塔に＞名前をつけよう。私達が地球の上一帯に，バラバラに散らばされないようにね。(3 'And they said one to another, Go to, let us make brick, and burn them throughly. And they had brick for stone, and slime had they for mortar. 4 And they said, Go to, let us build a city and a tower, whose top *may reach* unto heaven; and let us make us a name, lest we be scattered abroad upon the face of the whole earth.' Gen. XI. 3－4.)

バベルの塔は神がおられる天に至る塔，つまり神の門（*bāb-ilu*, babylon）だった。神は天まで上ろうとした人間の不遜を戒められて，彼らを分断して話す言葉を互いに理解出来ないようにして，塔建設を不可能にされたのだった。バビロニア（Babylonia）という国名は，この出来事に由来する，と言われている。[3)]

古代バビロニアは近隣諸国と活発に貿易して国力の充実を進め，メソポタミア南部を流れるユーフラテス河（the Euphrates）の沿りに，強力な国家を建設した。バビロニアの人々はイシュター（Ishtar）という女神を守護神にしていた。イシュターは愛と戦争をつかさどる女神で，ギリシアのアフロダイティー（Aphrodite），フェニキアのアスターティー（Astartie），ローマのヴィーナス（Venus）に相当する愛と稔り（love and fertility）をもたらす女神とも同一視されていた。[4)] 古代バビロニアの人々は，このイシュターを祭る壮大な神殿を築き，神殿を中心にして官庁の建物，博物館その他の主要建造物を配列した。こうして作られた都の中心部を囲んで，都を守る高い厚い堅固な防壁が築かれ，都の内と外とを結ぶ大門が作られた。このように組織的な構成を備えて作られた都は，地中海東側のオリエント世界諸国の古代都市の中でも，バビロンの都はその最初だった，と伝えられている。現代，バビロンの都のような都市は，「神殿中心の城塞都市」（Temple-Citadel）と言われている。[5)] エジプトやギリシアでも，メソポタミアと同じように「神殿中心の城塞都市」が作られていた。

比類ない豪華壮麗さをうたわれたバビロンの都が廃墟と化して，現在，イラク（Iraq）の首都バグダット（Baghdad）から約90キロ南の，ユーフラテス河の近くに残っている。[6)] このバビロンの都の廃墟に，防壁の跡が断片的に残っている。建造年代は不詳であるが，多分紀元前7世紀ネオ・バビロニアの時代，いやそれよりずっと早い時代に作られたものらしい，と推測されている。廃墟となった防壁の厚さは約5－7メートル，高さは壁が崩れ落ちてしまっているので，正確には判らないが，恐らく約7.5メートル位だったらしい，と推測されている。メ

ソポタミアは平原地帯だったので，それぞれの国は，外敵の攻撃から都を守るため，堅固な防壁をこのように高く築き，その外側に掘られた濠か運河か，それとも真近を流れる河で守られている事が必要だった。[7] 更に防壁の上部に作られた，戦闘員達が自由に行動出来る通路がその外側沿いに張り巡らされた胸壁に守られ，通路には一定間隔を置いて，連絡と退避用の塔が多く築かれていた。こうした構造の防壁は「小塔つき防壁」（turreted walls）と呼ばれていた。[8]

栄光の絶頂に達したバビロニアは，紀元前13世紀に，新興勢力のアッシリア（Assyria）王国に征服された。古代アッシリア人は，ノアの長男セム（Shem）の子孫だったと言われ，彼らの祖先はバビロニアからティグリス河畔に移って来た移民だった。アッシリアの首都は最初メソポタミア北部アーシューア（Asshur）に置かれていたが，後にニネヴェ（Nineveh）に移された。ニネヴェ創建の始祖を祭るアーシューア宮殿や，膨大な資料と美術品を収めた図書館が，この都にあった。ネオ・バビロニア帝国に，紀元前7世紀に征服され滅亡した古代帝国アッシリアの都の廃墟が現在ティグリス河近くに残っている。

アッシリアは征服した国々を兵力を以て制圧し，降服した敵国民を強制的に他国に移住させたり，虐殺したりした事で知られ，サーゴン二世（Sargon II King of Assyria 722−705 B.C.）の時代に絶頂期に達した好戦的な国家だった。敵国の軍事施設を破壊する攻撃用兵器を次々に開発して，実戦に使ったのは，アッシリアだった。[8] 新兵器を動員して，強固な防壁を破壊し，紀元前8世紀にアッシリアは栄華を誇ったバビロンの都を陥落させた。その後1世紀も経たないうちに，エジプトに侵入してメンフィス（Memphis）とテーベ（Thebes）の両都市を占領し，パレスティナ南部の国家ユダヤを侵略して，貢税を徴発した。アッシリアの領土はアルメニア（Armenia），アラビア（Arabia），エジプトにまで拡大して，その威光は頂点に達した。この時代にアッシリアの軍事力，経済力は強化され，貿易は拡大し，文化，芸術は発達した。アッシリアは，バビロニアと多くの共通点を持っていたが，特に文化，芸術面で共通するところが目立っていた。

アッシリアは，紀元前7世紀に建築と芸術の最盛期を迎えた。戦争と狩猟を好んだ国民性を反映してか，アッシリアの代表的な浅い浮き彫り彫刻（bas-reliefs）には，戦場と狩猟場面をテーマにした作品が多い。神殿や宮殿の壁面は，これらのシーンや象徴的な動物，それに天体の星座をテーマにした装飾画や，一連の浮き彫り模様の彫刻で飾られていた。また，ニネヴェの都を守る大門には，翼を広げた巨大な怪鳥の姿をした，回教の魔霊（jinns）の彫刻が刻み込まれていた。

戦争と残虐のイメージがつきまとう事が多かったけれど，歴史，文化，考古学などの研究調

査が進むにつれて，意外にも，アッシリアが芸術，文化の分野でも優れていた事が，19世紀以降再評価されて来ている。現在，大英博物館を始めとして，各国の博物館や美術館に保管されている作品によって，古代アッシリアは当時，高い芸術的水準に達していた事が明らかになった。

アッシリアの栄光の時代は，紀元前616－606年頃終った。アッシリアを征服したネブカドネザル二世（Nebuchadonezzar Ⅱ）は，遠い昔アッシリアに滅ぼされたバビロニア帝国を再建して，ネオ・バビロニアを建設した。彼は紀元前600年頃，荒廃していたバビロンの都の周囲に張り巡らされた防壁の外側に濠を新たに作り，損傷がひどかった防壁の全面的補強工事を実施した。こうして防壁の内側を，粘土を焼いて作った煉瓦をその間にモルタルを詰めて積み重ねて補強した，厚さ約30メートルに及ぶ外側の防壁が出来あがった。この防壁の内側に新しく防壁と濠が作られたので，都を守る二重の防衛線が完成した。こうして，ネブカドネザル王は，バビロンの都に過去の栄光をよみがえらせた。[9)]

建国の基礎作りが終ると，ネブカドネザル王は，近隣諸国を次々に攻略して，領土をエジプト国境まで拡大した。ネブカドネザル二世は大軍を派遣してエルサレムの包囲攻略戦を続けた。紀元前586年，エルサレムが開城投降すると，彼はエルサレムの国王はじめ，大貴族，官吏，職人，金銀細工技工など，殆んどあらゆる階級の人々1万人を捕虜にして，バビロンの都に連れ帰った。捕虜となったエルサレムの人々が異国の地で長い虜囚生活を続けた後，解放されて故国に戻ったのは，捕虜になってから50年後の紀元前538年だった。これは「バビロンの虜囚（Babylonian Captity）として，後世に伝えられているエルサレムの人々の悲劇だった。[10)]

国威を内外にわたって高めたネブカドネザル二世は，大王という称号で呼ばれるようになった。彼の治世の下で隆盛を極めた，ネオ・バビロニア帝国の中心はバビロンの都だった。この都の輪郭を見ると，都の中心には，この国の守護神，イシュターの女神を祭る厳かな神殿と，大王の王宮があった。この二つの建物を囲んで，数多くの大小の神殿，役所や国の施設などの主要建造物，それに物資取引の市場，居住地域などが組織的に配列されていた。バビロンは，神殿と王宮中心にして作られ，都の周辺を濠と防壁で囲まれた，オリエント世界や小アジア，エジプト，ギリシアで発達した，いわゆる神殿中心の城塞都市の一つだった。

都の中と外とを結ぶ大切な大通りの正面にイシュター・ゲート（Ishtar Gate）と呼ばれた大門が，紀元前600年頃作られた。[11)] この門はかなりの高さの所まで原形を留めて，現在も残っている。ところで，敵軍が押し寄せて都を攻落しようとした時，門はどうなるのだろうか。攻撃軍にとって最大の障害となったのは，都を囲んで築かれていた，高い厚い防壁だった。彼ら

は防壁を乗り越えるか，それとも，どこかに盲点を見つけて，攻撃兵器（siege engines）を使って，防壁の一部を突き崩すか，地下道を作って防壁を土台から崩落させて，そこを突破口にして中に攻め入る方法を用いる事があった。この方法は時間が長くかかるし，防壁の上部から加えられる，防衛軍の反撃に攻撃隊の兵士が絶えず身をさらす危険があったので，容易な事ではなかった。

門は都を囲んでいる堅固な長い防壁に作られた切れ目の部分だった。門を打ち破れば，それを突入口にして中に攻め込む事が出来るから，城塞都市を攻落しようとすれば，門は常に敵軍の最大攻撃目標にされ，敵軍主力部隊の猛攻を受けた。それだけに，門は防衛上弱点となる欠陥部分だった。このため，門の両側に塔を築いたり，特別な防衛施設を作って，特に門の警備を厳重にする事が必要だった。[12)]

これと矛盾する事になるが，戦時とは違って平時の場合には，門は都の出入口として中と外を結ぶ役目を備えていた。そのため，人や物の行き来に便利でなければならない。当時としては更に重要な事だったが，門は王が臣下の者達の前に姿を現わす場となっていた。ネオ・バビロニアでは，国の守護神だった女神イシュターの神意に従がって，神政政治が行われていたから，ネブカドネザル大王は，まさに神のような存在だった。臣下の者達は威厳と威光に溢れる大王を目の前に見て恐惟感激した。イシュター・ゲートは，この劇的な舞台にふさわしい一つの芸術作品として作られていた。これは多少の差はあったが，オリエント世界各国に共通していたセレモニーだったので，それぞれの国の都の正面入口に当る大門には，特に重点が置かれていた，と言われている。[13)]

イシュター・ゲートは現在，まだかなり原形を留めて，残っているから，創建当時のこの門がどんなものだったのか，2600年後の現在でも想像する事が出来る。イシュター・ゲートの，化粧煉瓦で作られた壁面は，大きな雄牛や龍（ドラゴン）や一角獣（ユニコーン）を刻んだ浮き出し彫刻で飾られていた。門の両側の柱や壁も，イシュターの女神に仕える鳥獣や天体の星群などを象徴的に表現した，浮き出し彫刻の模様で飾られていた。これらの無気味な恐ろしい動物や鳥の神秘的な彫刻は，

イシュター・ゲート
（ベルリン国立博物館所蔵）

イシュター・ゲートの巨大建築様式とうまく調和して，臣下の者達が大王を拝謁する場にふさわしい芸術効果を作り出していた。イシュター・ゲートに通じる大通りの路上では，国内の産物や，外国から取り寄せた物品を取り引きする市（bazaar）が開かれて，活況を呈していた。防壁の外側には，都の人達の生活に必要な品々を生産し，補給する工場があった。

ネブカドネザル大王の下でネオ・バビロニアは，古代バビロニアの繁栄を再現し，国力を充実させた。ネオ・バビロニアで発達した天文学，数学，医学，薬学，音楽がこれらの分野における後世の進歩に大きな貢献をした事は，広く知られている。

ネオ・バビロニアの時代が約150年間続いた後，紀元前6世紀中頃，ネオ・バビロニア帝国は，ペルシア国王サイラス二世（Cyrus Ⅱ）が支配していたペルシア軍に侵略されて滅亡した。サイラス二世はペルシアのアキメニッド王朝（Achaemenid Dynasty）出身の王だった。サイラス二世歿後，ペルシアは歴代国王の下で領土を拡大して，エジプトからパンジャブ（Punjab），ダーダネルス海峡（the Dardanelles）からサマルカンド（Samarkand）にまたがる広大な領地を支配する大帝国を建設して，その強大な国力を誇った。しかし，ギリシア征服を図って遠征したペルシア軍はサラミスの海戦（the Battle of Salamis），とマラソンの戦い（the Battle of Marathon）との，海上と陸上との2つの戦いに破れた。ちなみに，ギリシアの存亡を堵したマラソンの戦いの勝利の報を伝える命令を受けた伝令の兵士が，アテネまで走り続けた事が，オリンピック競技に加えられたマラソン競技の起源になった逸話はよく知られている。マケドニア国王フィリップ二世（Philip Ⅱ）が暗殺されたため，21才で王位に即いたアレクサンダー三世（Alexander Ⅲ of Macedonia）[14] は，ギリシア全土を平定して小アジアに兵を進めた。紀元前331年，ペルシアは後に大王と呼ばれたアレクサンダー三世に征服されて滅亡した。

紀元前4千年から5千年の間，古代史の世界が繰りひろげられていたメソポタミアから，歴史の世界はペルシア滅亡後，ギリシア，ローマを中心とする地中海へと移っていった。

これまで概観したように，メソポタミアでは，バビロニア，アッシリア，ネオ・バビロニア，ペルシアなど，古代史に名を留めている強大な国家が次々に現われては消えて，興亡盛衰を繰り返して来た。その陰では，歴史にその名を殆んど留めていない幾多の弱小国家や民族が，誕生しては消滅していった。国々は互いに敵国の侵略から自国の領土や国民を守るとともに，相手を攻撃して圧伏することが必要だった。そのため，さまざまな防御施設を作り，また，防衛と攻撃のため，さまざまな武器，兵器が考案され，作られ，改良が加えられた。

最大の攻撃目標となったのは，国の政治，経済，宗教の中心になっていた都だった。そのた

め，各国家は敵の攻撃に備えて，バビロンの例に見たように，いろいろな手段方法を用いて，都を強固な城塞都市（fortified city）に作りあげた。メソポタミアは東側を流れるティグリス，西側を流れるユーフラテスの両大河に挟まれた，南北に長く伸び広がっている乾燥した平原地帯になっている。各国はこの地帯に多い粘土を利用し，天日干しして作った煉瓦を建材にして，家を作り，都に宮殿，神殿，役所，博物館などを建築した。そして，堅固な高い厚い防壁を一重，二重に都の周囲に張り巡らした。[15] 近くに河川が流れていれば水を引いて，防壁の外側に運河，濠（水が利用不可能なら空壕）を更に張り巡らして，敵襲を防いだ。メソポタミアでは，紀元前約4千年以前から，膨大な奴隷の人力と無尽蔵の材料を使い，長い年月をかけて高度な技術水準の城塞都市が作られていた事が，これまでの歴史や考古学の現地調査によって明らかにされた。

西洋文明発展の基礎となったキリスト教が，最初に根づき発展したのはメソポタミアだった。神が約束された「乳と蜜が流れる地」（'a land that floweth with milk and honey' **Numbers** XVI, 13－14）は，メソポタミアにあったカナーン（Canaan），現在の死海近くのパレスティナ（Palestine）だった。イスラエルの民がエジプトから「約束の地」（'a Promised Land' **Gen.** XII, 7）を求めて，カナーンに移住して来た事が，次のように「ヨシュア記」（**Joshua** 5－6）の中に語られている。

メソポタミア地図

イスラエルの民は，モーゼが定めた彼の後継者である預言者ヨシュアに導かれてエジプトを出た後，40年間，荒野を放浪し旅を続けた。そして，彼らは初めて目の前に，一つの都を見た。それが彼らに神が約束された，北から死海に流れ注いでいるヨルダン河の沿りにあったジェリコ（Jericho）の都だった。現在，残っているこの都はヨルダン西部にあり，エルサレム（Jerusalem）から約22.5キロメートル東南の地にある。ジェリコの都は高い堅固な防壁で周囲を囲まれていた。考古学的調査によると，高さ約3メートル，幅約4.5メート

ヨルダン地図

ルの防壁だった。大門は彼らを拒んでいるように固く閉ざされていた。やむなく，彼らは防壁の外側の荒野に天幕を張って野宿していた。すると，神の使いの天使がヨシュアの前に現われて，神のお告げを伝えた。おまえ達戦士は全員整列して，都のまわりを一周せよ。これを六日間繰り返せ。7人の僧侶達は雄羊の角で作った角笛を7つ持って，方舟（the ark）の前を進め。7日目に全員で都のまわりを7周し，僧侶達は角笛を吹き鳴らせ。僧侶が吹き鳴らす角笛の音を聞いて，おまえ達が全員大きな鬨の声を上げたら，都の防壁が一挙に崩れ落ち，目の前の崩れ落ちた防壁を乗り越えて，おまえ達が都の中に攻め込む時が来るだろう，と。

イスラエルの民は，神の教えを守り，7日間忠実にこの行事を続けた。彼らが神のお告げを実行し終えた瞬間，奇蹟が起こった。イスラエルの民をこれまで拒み続けていた，ジェリコの都の堅固な防壁も，固く閉ざされていた都の大門もすべて，音を立てて崩壊した。

イスラエルの民は都に攻め入り，火を放ち，古い不浄な物をすべて焼き払った跡に，彼らの敬まう神の神殿を築いて，新らしい都を設立した。

このジェリコの陥落の奇蹟について，メソポタミア地方の脆い土質と，昔から現代にかけて使われた作戦行動とを結びつけた，次のような研究が示されている。

イスラエルの民が約束の地ジェリコに辿りついた頃，防壁は老朽化していたが，ジェリコの人々は防壁を修理する事を長い間怠たり，放置しておいた。この事実を奇蹟が起こった条件の一つとして，考慮する必要がある。次に神のお告げには，ジェリコの都の防壁の周囲を7日間行進を反復し，7日目の行進の終りに一挙に全員鬨の声を挙げ，雄羊の角笛を繰り返し7回高らかに吹奏する事が，ジョシュアに従がっていたイスラエルの民に義務づけられていた。神のこの教えが，昔から現代に至るまで用いられて来た戦術の一つと一致している，という次の研究が示されている。[16)]

セクタス・ジュリアス・フロンティナス（Sexus Julius Frontinus）というローマ人が，紀元一世紀の終り頃出版した戦略集の中に，こんな例がある。ポンペイウス（Gnaeus Pompeius Magnus）は，ローマ第一次三頭政治家の一人だった。彼は軍隊を率いて河を渡ろうとしたが，対岸に敵軍が陣を構えていたので，河を渡る事が出来なかった。そこで彼は一計を案じ，部下の軍隊を陣営から連れ出しては，また陣営に戻る行動を繰り返し続けた。対岸の敵は最初のうちは，ローマ軍が河を渡って攻撃して来るのではないか，と緊張して，彼らの動きを見守っていた。しかし，ローマ軍は同じ行動を繰り返すばかりで，いっこうに新しい行動に移る気配を示さなかった。そのうち敵軍は緊張を緩めて，すっかり油断してしまい監視を怠たるようになった。ポンペイウスはこの機会を見逃がさず，敵の油断に乗じて，敵軍

陣地を急襲して，渡河作戦に成功した。ポンペイウスが取った作戦行動は，ジェリコを陥落へ導いた，神のお告げと非常によく似ていた。

イスラエルの民は武装して，六日間毎日防壁に沿って行進を繰り返し続けた。ジェリコの住民は防壁の外側を行進しているイスラエル軍の足音を聞いて，最初のうちはいつ中に攻め込まれるのか，と不安な恐怖に脅えて，行進の響きを聞く度毎に跳び立ち，急いで武器を持って警備についた。しかし，これは最初のうちだけで，イスラエルの民が毎日おなじように行進を繰り返していたのに，何事も起こらなかったので，いつしか油断してしまった。そして，7日目になると，これまでとは形勢が一変し，突然イスラエル軍が突撃の鬨の声をあげ，突撃開始の角笛を高らかに吹き鳴らす響を聞いて，ジェリコの人々は驚ろき慌てて混乱状態に陥りジェリコは壊滅した。

防壁が壊滅した原因は，天日乾燥して作られた粘土の煉瓦は老朽化して脆くなっていた。また積み重ねた一つ一つの煉瓦を固めるため，モルタルの代りに使われていた粘土が風化して粘り気がなくなりぼろぼろになっていた。このようにひび割れ個所が多い老朽化した防壁を長い間，その侭放置しておいた事が防壁倒壊の主な原因だった，と思われている。更にイスラエルの民が7日間行進を繰り返した事により，地響が伝わり，ひび割れがいっそうひどくなった事も考えられる。奇蹟は老朽化という自然現象と，たまたま時機的に重なったのではないかというのが，これまで進められて来た研究の結論になっている。

同じ行動を繰り返して，次第しだいに敵を油断に誘い込んで急襲に成功した現代の戦略の例としては，次の二つがある。その一つは，イギリス軍が第一次大戦中の1916年に，エジプトのシナイ半島（Sinai，Egypt）で，トルコ・ドイツ連合軍に対し使って成功した戦略。これより更に新らしいもう一つの例は，1973年10月，シリアとエジプト連合軍が，イスラエルの国境近くで動員を繰り返した事により，イスラエル軍を欺き勝利を収めた例である。[16)]

こうして，イスラエルの民はジェリコの都に進入する事ができた。彼らは都に火を放ち，古い不浄な物をすべて焼き払い，その跡に神を敬う彼らの都を築いた。

ここに語られているように，メソポタミアでは，キリストが生まれた遥か昔の聖書の初めの時代に，紀元前7,000年頃ジェリコの都は，その周囲を厳重に防壁で囲まれた城塞都市として発達していた。考古学調査によると，ジェリコの都は，本格的な城塞都市としては，恐らく世界最古の都の一つだった，と推定されている。[17)]

神殿中心の城塞都市

メソポタミアの各国の古代城塞都市が，どのように作られ発展して来たのか，これまで辿って来た。地中海を挟んでメソポタミア南西の方角にあるエジプトでは，ほぼおなじ時代に文明がナイル河沿岸で発達した。ナイル河下流の北部エジプト（Upper Egypt）では，ギザ（Giza），ナイル中流と，上流にある南部エジプト（Lower Egypt）では，アバイドス（Abydos），カルナック（Carnak），テーベ（Thebes），ルクソール（Luxor）などの古代都市が誕生して繁栄を極めた。特に中期古代王朝（Middle Kingdom 2400－1580 B.C.）の首都だったテーベには，ルクソールからカルナックにかけて，王家の谷（the Valley of the Kings）と呼ばれている地帯にプトレミー王朝（the Ptolemies）の歴代国王の多くの墓がある。またエジプト人が崇敬した太陽神アマン（Ammon）を祭る神殿が幾つか残っている。その中で特に有名な神殿は12代王朝期に始められたと伝えられているカルナックにある大寺院である。その他この近くにあるアバイドス（Abydos）は，紀元前31－28世紀頃の古代エジプトの歴代の王者の墓と，エジプト

エジプト地図

人の信仰が篤かった下界の神であり，また稔りをもたらすナイルと太陽の神だったオサイアリス（Osiris）に献げられた神殿がある聖都（Sacred City）だった。また，ナイル河をアスワン（Aswan）から更に上流にさかのぼった所にあるアブー・シンベル（Abu-Simbel）は，ラメス三世によって築かれた大神殿を中心にして，周囲に防壁と塔の防衛線を張り巡らして作られた，偉大な城塞都市だった。

メソポタミアとおなじように，エジプトでも，彼らが崇拝した神や国王を祭る神殿や王宮は，都の中心に築かれていた。これらの都はすべて，その周辺に堅固な防壁が張り巡らされた城塞都市の形を取っていた。また，メソポタミアとおなじように，エジプトでは平坦な地に都が定められることが多かったので，安全を守るため，敵が容易に都に攻め込めないように，防壁も，神殿も，宮殿も上へ上へと高く築かれていった。[18] こうした必要に応じて，古代エジプトの古都に，高いピラミッドが無尽蔵の建築材と膨大な人数の奴隷を惜しげなくつぎ込んで，長い年月をかけて築かれた。メソポタミアにも，エジプトのピラミッドによく似た形式で築かれた王宮の遺跡がある。紀元前8世紀初めに，この宮殿は古代アッシリアの国王サーゴン二世（Sargon Ⅱ, King of Assyria）のため，首都ニネヴェからかなり離れていて，モスル（Mosul）から約20キロメートル北東にあったコールサバッド（Khorsabad）の都に作られた。19世紀中頃まで廃墟の状態になっていたが，フランス公使エミール・ボッタ（Emile Botta, French counsul）によって発見された。サーゴン王の宮殿（Sargon's Palace）は広大な敷地の上に，建物の外側に幾段もの層になっている段階が積み重なっていて，頂上に神殿がある，ジグラット（Ziggurat）式の，ピラミッド形建築だった事が判明した。この廃墟の調査報告が発表された時，世紀の大発見として大きな話題となった。[19]

アッシリアにあるこのサーゴン王の宮殿と，もう一つのエイヌー・アダッズ（Anu-Adads）神殿は，エジプトのメディネット・ハブー（Medinet-Habu, Egypt）にある，紀元前12世紀に建造されたラメス三世（Rameses Ⅲ）の宮殿とあわせて，防壁と塔で厳重に守られた城塞都市の中心に築かれていた。この3つの城塞都市は，その後に作られたすべての神殿中心の城塞都市の先駆となる条件を備えていた，と評価している研究者がいる。[20]

さて，神殿中心の城塞都市は，神と城が結びついて成立している。城塞都市が発達した過程を要約すると，次のようになる。遥か遠い原始時代の人間は，危険が迫るのを本能的に感じると，身近にある岩や大木の陰や洞窟の中に隠れて危険から身を守った。年月が経過するうちに，人間は経験した事からいろいろな智慧を学び取り，自然界の物を利用するだけではなく，道具を使って自分や家族の者達を守る物を作る方法を考え出した。こうして，人間は知らない他の人間達や恐ろしい野獣から襲われないように，自分達が固まって住んでいた集落の周囲に近く

の河や池から水を引いて濠を作ったり，水が利用出来ない場合は空壕を掘って，危険から身を守った。また，濠に囲まれた居住地内に，見張りや避難に役立つ塔を作った。この防衛の仕組みが原形となって，周囲を濠と防壁で囲まれ，その中に天守閣が高く聳える城が築かれた。

原始時代から，それぞれの種族や民族は，彼らが崇拝し，彼らを守ってくれる神を持っていた。平和な時は神は彼らに稔りをもたらし，敵と戦う時は神は彼らを守って，勝利をもたらしてくれる，と信じていた。だから，彼らは自分達を平和な時も，戦乱の時も守ってくれる神を祭る神殿を作って，出陣の時は戦勝と加護を祈り，凱旋の時は神に感謝を献げた。このように，神は古代の民族にとって，彼らの生活の中心になっていた尊い存在だった。当然の事ながら，神を祭る神殿は城塞化されていた都の中心に築かれ，国王の宮殿はその近くに築かれていた。この二つを中心にして，防衛線で守られている都の都市計画は進められ，神殿中心の城塞都市（temple-citadel）が築かれた。

メソポタミアとエジプトで作られた城塞都市の基礎計画には，共通点が幾つかあった。どちらの地形も平坦な広い土地が広がっていたので，都の敷地は方形か長方形に定められた事が多かった。高い防壁に囲み込まれた土地の上に整然と区画された街路が走り，その両側に建物が立ち並んでいる都の中心には，神殿と宮殿が高く聳え立っていた。このように構成されていたメソポタミアやエジプトの城塞都市の全体的な光景は，厳粛で近寄り難いものだった。[21] 特に敵襲に備えて築かれた高い厚い防壁は，外から見ると，そこを上って乗り越える事は不可能に見えた。エジプトでは，ラメス三世の神殿があったメジネット・ハブーの都は，その東西側に大きな城門が作られ，都の周囲全体に築かれた２重の防壁に守られていた。厚い防壁の広い頂上部に広い通路が造られ，通路には一定の間隔を置いて堅固な塔が立ち並び，通路の外側には戦闘員が敵の攻撃から身を守る塁壁が設けられていた。防壁頂上部の通路は，人員の移動や兵器運搬や補給のために使われ，塔は敵の動きを見る見晴らしや，敵との応戦や避難所，防戦用武器の格納場所などに利用されていた。[22]

南部エジプト（Lower Egypt）にあるアバイドスは，歴代王朝の王の墓があり，古代エジプトに豊穣をもたらした，太陽とナイルの神オサイリスに献げられた聖なる都だった。早くから完全に城塞化されたアバイドスの周囲に築かれていた防壁の頂上部には，既に小塔が築かれていたそうである。[23] 防壁の内側に，あるいは防壁の内側を掘り抜いて，頂上に出る階段が作られていて，階段は地上と頂上との戦闘員の移動や連絡，武器の上げ下ろしのために使われていた。メソポタミアのジェリコには，紀元前７世紀頃までに，高さ３メートル以上，厚さ４メートル以上の堅固な防壁が都の周囲に築かれており，考古学の遺跡調査の結果によると，防壁の

曲がり角に少なくとも石の塔が築かれ，塔の内部から下に通じる階段が作られていた事が明らかになった。[24] このような威圧的な防壁が弓矢が発明された3,000年も前に築かれていたとは驚ろくしかない。更に後の時代になって，弓矢や槍，刀などの武器を使った攻防戦が行われるようになると，防壁の上にいる戦闘員は下に攻め寄せて来た敵兵目がけて，投げ槍や大きな石や木，動物の死体，汚物などを投げつけて応戦した。エジプトはシリア領内を侵略して，紀元前18－10世紀にかけてシリアを相手にして戦争を続けた。このシリア戦争（Syrian War）をテーマにして描かれた壁画が現在残っている。ここに描かれている城塞都市を中心にして繰りひろげられた戦争場面を通して，この時代の戦いぶりを想像する事が出来る，と言われている。

メソポタミアやエジプトに発達した城塞都市は，方形または長方形の平地に敷地を定めて作られた都を，高く厚い堅固な防壁を築いて囲み込む，という基礎計画（ground plan）に基いて作られていた。これは，攻撃軍を出来るだけ高い防壁の下に引き寄せて，防壁の上から応戦する受身の作戦には有利だった。守備軍にとって生命線だった防壁を死守することが最も重要だったから，作戦計画は攻撃より防衛に重点が置かれていた。[25] この防衛優先の基礎計画に変化の兆しが，中東（Middle East）地方で作られた城塞都市に現われて来た。

紀元前20－12世紀頃，小アジア地方で栄えたヒッタイト人（the Hittites）は強大な帝国を建設して，中東地方に君臨していた。ヒッタイト人が紀元前10世紀－8世紀頃築いたシンジャーリの都の城塞（the fortress of Sinjerli）は，軍用建築史の観点から見て，非常に注目に価する構造だった。これまで述べたように，エジプトでも，メソポタミアでも，方形や長方形の敷地の平地を利用した基礎計画に基く，厳粛で整然とした構成の，高い城塞都市が好んで築かれていた。しかし，ヒッタイト人は地面の地形をその侭利用して山の高みの上に要塞を築き，その周囲に防壁を築いた。防壁の中には，自然の防衛線が幾つもあったから，規則的な計画を取り入れようとする人工的な試みは全く用いられなかった。シンジャーリの城塞都市は，その周囲に張り巡らされた，外側と内側との二重の防壁によって守られていた。防壁の上部には，半円形の塔が一定間隔を置いて立ち並んでいた。この城塞都市の構造は細かい点で，中世西ヨーロッパで作られていた，城を中心とする城下町の構造と，細かい点で共通点が多い事を指摘している研究者がいる。[26] シンジャーリの都の要塞は，四角形または長方形な平面の構成をとって作られた，エジプトやメソポタミアの城塞都市とは全く違う，長円形か円形の立体的な構成を取って築かれていた。エーゲ海からメソポタミアの境界まで，小アジア全体に広がる広大な領土を支配していたヒッタイト人は，山の上にある彼らの城塞の地の利を利用して，襲来する敵軍を迎え撃って戦っては機を見て城内に退ぞく戦術を繰り返した。エジプトやメソポタミアで守備中心の防衛戦が行われていたのに対し，ヒッタイト人は地の利を利用して，攻撃戦に

移る作戦を立てて，彼らの城塞都市を守った。ヒッタイト人が君臨していた中東地方では，こうして，城塞都市攻防戦は，守勢中心の戦いから攻撃中心の戦いへと変化していった。[27)]

ギリシアのアクロポリス

中東地方の城塞都市作りの基礎計画の影響は，紀元前30世紀から11世紀にかけて，ミノス，またはクレタ文明（Minoan or Crete Civilization）が栄えていた西方のエーゲ海（the Aegean Sea）沿岸諸国やエーゲ海に浮かぶ島々から，ミケーネ文明（Mycenaean Civilization）が栄えたギリシア本土にまで及んだ。[28)] これらの地域の多くは山岳地帯になっていた。またエーゲ海の島々の多くは海面から切り立っている絶壁の上にあった。ヒッタイトのシンジャーリ城塞都市が築かれた地形と共通点が幾つもあった。中東アジア地方の城作りの影響が，まず最初に直接及んで来たのは，エーゲ海東南部にあったクレタ島（Crete）やロドス島（Rhodes）だった，と言われている。クレタ島は，殆んど木が生えていない，岩山ばかり連なっている，エーゲ海では一番大きい島だった。島中央部に聳えているアイダの山（Mt. Ida）は，イギリスロマン派の詩人ウィリアム・ブレイク（William Blake）が初期の詩に詠っているように詩神が宿っている聖なる山と信じられていた。またクレタ島はギリシア神話の神々の主神ゼウス（Zeus）誕生の地と，古代ギリシア人が信じていた島だった。アイダの山から東にあったクノッソス（Knossos）を中心にして，ミノス（クレタ）文明は紀元前約30－14世紀に栄えていたが，クレタ島がギリシア本土から侵略を受けて衰退した後，紀元前67年にクレタ島はローマに征服されて，ローマの植民地となった。1900年にアーサー・エヴァンス卿（Sir Arthur Evans）指導の下にクノッソス遺跡の発掘が進められ，ミノス文明の中心地として栄えたクノッソスの宮殿や，その周辺にあった都の跡が明らかにされた。ミノス—ミケーネ文明期に，クレタ島やギリシア本土で，新らしい基礎計画に基いた軍用建造物が，東方の小アジア地方から直接影響を受けて始まった。クレタ島で発見された最も古い軍用建造物の遺跡の中に，その例がある事が指摘されている。紀元前約2世紀に築かれたと推定されている，古代クノッソスの塔は，その一例と言われている。しかし，クレタ島におけるミノス文明の発達は，その後平和的傾向を辿ったので，塔は軍事的防衛施設がなかった宮殿の建物の下に埋め込まれてしまった，とみなされている。[29)]

時代がずっと後の事になるので，あるいは小アジア地方からの影響とは直接関連しないかも知れないが，ロドス（Rhodes）島に関する有名なエピソードが伝えられているので，ここにその事を書き添えておきたい。

クノッソスが衰退に向った頃，クレタ島の東，トルコ領沿岸近くのロドス島では，軍用建造物が発達していた。紀元前400年頃築かれた城郭の外壁（curtain wall）の一番厚い部分は約5メートルもある堅固な防壁だった。城の防衛力と守備隊の力量は，紀元前305年にマケドニア王デメトリュース・ポリロシーティーズ（Demetrius Poliocetes）から包囲攻撃を受けた時，試練に立たされた。デメトリュース王は当時最も強力な，包囲攻撃用兵器（siege engine）を動員して，ロドスの城を攻め落そうとした。彼が使った攻め道具の兵器の中には，当時恐れられていた遠距離投石機（heavy petrariae），防壁破壊機（battering ram）が含まれていた。この二種の兵器はどちらも長さ約50メートルもある巨大兵器だったので，操作には1チーム1000人の兵士達を必要としたそうである。猛攻撃が海上，陸上両面から行われた。陸上からの攻撃には，デメトリュース王の有名な「ヘレポリス」（'Helepolis'）と言われた，防壁を上から攻撃する巨大な攻撃塔が使われた。しかし，デメトリュース王は彼の戦術と戦力を駆使して1年間攻撃し続けたにも拘わらず，ロドスの城を攻略する事が出来なかった。勝利はロドス側のものとなった。戦史に残る有名な「ロドス攻防戦」が敵味方合意の上で終り，デメトリュース王は囲みを解いて帰国する時，ロドス軍の不屈の勇気に心うたれていた。王はロドス軍のため自慢の巨大な投石機や防壁破壊機ととも，攻撃塔や他の攻城兵器一切を残して立ち去った。[30]

ロドス島の人々は，これらの兵器を売った金で勝利の記念に，彼らの守護神だった太陽の神ヘリオス（Helios）の巨大な青銅の像を鋳造して港の入口に飾った。古代世界の七不思議（the Seven Wonders of the Ancient World）の一つに数えられた，港の入口を両足でまたいでいたこの巨大なブロンズ像（colossal bronze statue）は高さ約35メートル。アメリカの自由の女神像の高さは約50メートル。ロドス島のヘリオス青銅像の方が，自由の女神像より15メートル程低かった。大小の船は，この青銅製の巨像の下を通って，ロドスの港に出入りしていた。ロドス島の巨像は，紀元前224年，島を襲った大地震のため，膝の部分が折れて倒れてしまった。エジプトから復元費用の申し出があったが，神託により復旧工事は行われない侭になっていた。653年にアラブ人がロドスに侵入した時，彼らは像を解体して小アジアに船で運び，ユダヤの商人に鉄くずとして売ってしまった，という事である。[31]

エーゲ海の島々を経て，小アジア地方の城塞都市作りの基礎計画は，ギリシア本土に及んで来た。この影響が特にはっきり現われたのは，ミケーネ文明の中心となっていたペロポネッサス半島中央部の，アーゴリス（Argolis）地方の都ミケーネ（Mycenae）だった。ミケーネはギリシア文明以前に栄えたミケーネ文明（Mycenaean Civilization）の中心として，ホーマーの

1994年8月著者撮影
ロドス島の巨大な青銅像が立っていた港入口

抒事詩の中で，そこに至る「道は広く，アガメノン（Agamemnon）王国の，黄金色に輝く都」と詠われているように，紀元前1400－1100年頃，全盛を極めた都市国家だった。しかし，ミケーネは紀元前486年に滅亡して以来，その存在は知られない侭になっていた。ところが，少年時代からホーマーの叙事詩の世界に心引かれていた一人のドイツ人青年実業家がいた。彼は事業に成功して財産を手にすると，40代半ばで惜しげなく実業界を引退して，少年時代から抱いていた夢を実現するため，全財産を投じて，ギリシアの廃墟発掘調査に集中した。そして彼は1876－77年の2年間に，ミケーネとトロイの両遺跡で，従来の考古学史を書き変える程の大発見をして，画期的な業跡が世界中で認められた。このアマチュア考古学者はドイツのハインリッヒ・シュリーマン（Heinrich Schlieman）だった。[32)]

シュリーマンの発掘によって，それまでホーマーの叙事詩に描かれていた虚構の都と思われていたミケーネは新たな脚光を浴びた。調査は更に本格的に続行され，古代の城塞都市ミケーネは，小アジアの影響を受けて築かれていた事が明らかになった。既に見たようにメソポタミアやエジプトの城塞都市とは全く違った基礎計画を使った城塞都市が，東方の小アジア地方を中心に発達していた。両者の相違点を見ると，まず城塞都市が作られた土地の地形が違っていた。メソポタミアとエジプトの地形は，どちらも広い平原地帯になっているから，平坦な土地を自由に利用して，城塞都市の敷地は四角形または長方形に定められた。平坦な敷地の中に神殿中心の市街地が，整然と作られていた。土地が平らだから市街地造成には都合よかったが，

敵は自然的障害がないから攻め入り易い。敵の攻撃を防ぐためには，敵が都に入り込めないように，高い堅固な防壁や，見張りや信号用の高い塔を作ったり，敵の侵入に備えて，都の中心にある神殿，宮殿，その他の主要建造など高く築く事が必要だった。こうした地形上の条件があったから，メソポタミアやエジプトでは，高さに重点を置いた城塞都市が発達した。

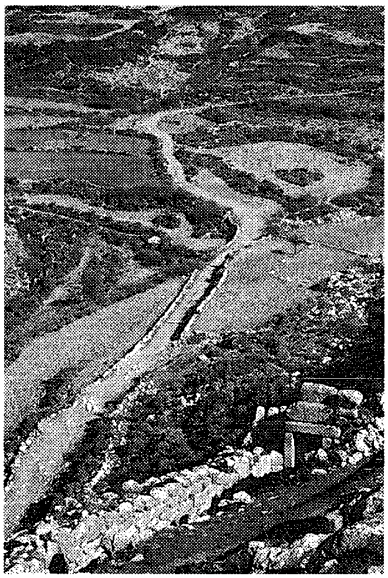
これに対し，ヒッタイトのジンジャーリの城塞都市やクレタ島のクノッソスの例で見たように，小アジア地方では城塞都市が，山岳地帯の岩山を天然の要害の地として築かれ発達した。こうした所では，四角形や長方形に敷地を定める事は地形の面で制限があったから，殆んど不可能な事だった。そこで，頂上付近の斜面を含めた土地を敷地にすると，敷地は自然的に円形または卵形の長円形になった。城塞都市を守る防壁は自然の地形に従って，岩山をその侭利用したり，絶壁部分には無理して防壁を設けないでおいて，自然と人工の防壁を組み合せた防衛線が張り巡らされていた。城塞都市は岩山の高みの上にあった。城を攻め落とそうとする敵は，遥か下のふもとから攻め上がらなければならない。城塞都市は天然の高い優利な所にあるのだから，平地にある城塞都市のように，特に高さに重点を置く必要がなかった。また，平地の城塞都市が，いわば，座して敵の来襲を待つ，という受け身の防衛体勢を取っていたのに対して，山岳地帯の城塞都市では，受け身な防御体勢を取って時間を空費している間に敵に接近を許す

シンジアーリ城塞都市の見取り図

より，むしろ城外に出て敵を待ち伏せて，勝手知った地の利を利用して迎え撃って撃退する，積極的な戦術が取られていた。[33]

こうした城塞都市計画の影響がエーゲ海を渡ってギリシア本土に及ぶと，城塞都市作りの面にも，戦術の面にも変化が現われて来た。ギリシアの山岳地帯には，高い岩山や丘の上に築かれた高丘城塞都市（acropolis）と呼ばれた都市国家が広まり発達した。[34] その最初の代表的な例は，アーゴス（Argos）の都ミケーネに築かれたアクロポリスだった。古代ギリシアのアクロポリスは，高い丘の地形を利用して巨岩を入念に組み合わせて築かれた防壁に囲まれていた。厳重に築かれた大きな石作りの門に至る坂道以外に，アクロポリスに至る道はなかった。アクロポリスが岩山の上に聳え立っている光景はどことなく，石造建築の城や寺院が険しい丘の上に見える，中世ヨーロッパの風景を思い出させる，と言う人もいる。ギリシア本土のミケーネの都，そこから東南にあるティリンズ（Tiryns）の都，小アジアのトロイの第六の都は，いずれもミケーネ文明が栄えた紀元前15－12世紀頃から初まった，と言われる。[35]

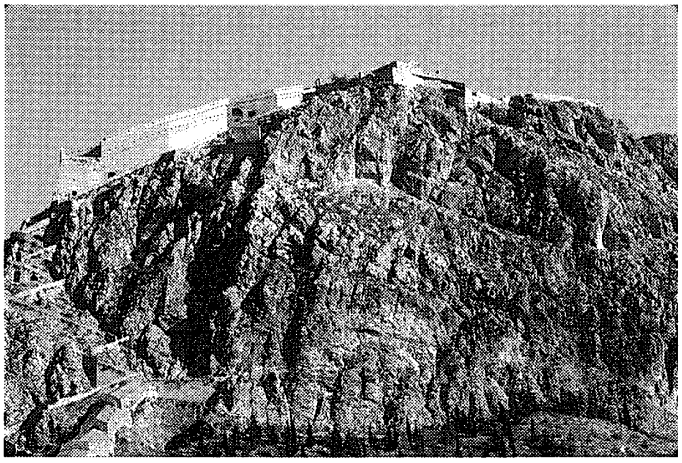
ミケーネの城塞は，そこに近づく事が，殆んど不可能と思われる高い岩山の上に築かれていた。その防衛線となっていたのは，城塞を囲んで巨大な石の塊まりを組み合わせて作られた防壁だった。ギリシアの伝説によれば，このような巨大な石を使った石造工事をしたのは，キュクロプス（Cyclops）と呼ばれた一つ目の巨人達だった。そのため，このような石造の古代建築様式は，キュクロプス式（Cyclopean）つまり巨岩積み建築と現在呼ばれている。防壁には整然と築かれた形跡が全く認められない。ミケーネの城塞の光景は，地形の特徴と石造工事が自然に一体となって結び合い，一つの新らしい全体を作り出しているように見える。現場工事をして働いた石工達の長は，現場の地形から利用出来る物なら何でも自在に取り入れて，工事に直接役立てて使いこなす特殊の能力を持っていたようにさえ思われる。[36]



1967年11月著者撮影
「ライオン・ゲート」に至る長い狭い坂道

城塞の下にあるミケーネの市街地から，長い坂道が一本延びている。この道は上がって行くと，ライオン・ゲートと呼ばれる城塞の大きな石造の正門に突き当たる。この門を通り抜けて中に入った右側南下のあたりに，トロイ戦争（Trojan War）の時，ギリシア遠征軍の總司令官だった，ミケーネ王アガメノン（Agamemnon）の墓所がある。下の市街地からライオン・ゲートに通じる坂道は狭くて長い。

ミケーネのアクロポリス見取り図



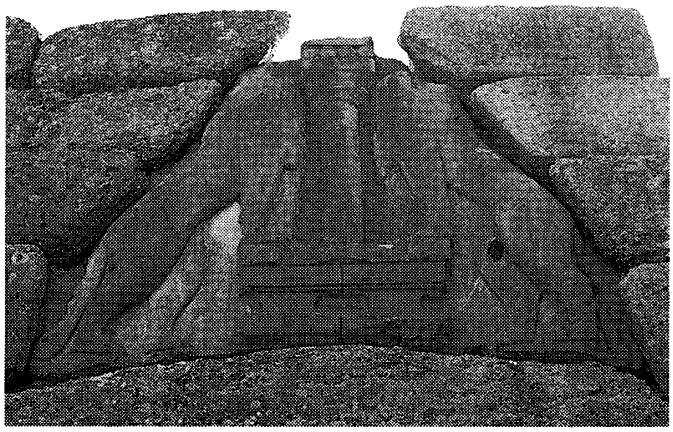
1967年11月著者撮影
ミケーネの復元された宮殿

道は敵襲に備えて，わざわざ，こう作られていたのだろう。狭い坂道の両側には，巨石を組み合わせて築きあげた防壁が，どこまでも続いている。狭い坂道は，この両側に連なっている堅固な防壁に挟み込まれた格好になっている。

この長い坂道の両側に築かれていた二本の防衛線こそ，城塞に住んでいる者達にとって命の綱の防衛線だった。城塞を攻め落そうと攻め寄せて来る敵軍兵士達は一度に多勢そろって狭い険しい坂道を進めない。城塞を守る兵士達は道の両側の防壁の上に出て，真下の敵兵達目がけて弓矢を放ち，投げ槍を投げかけて勇敢に戦った。この戦いには，城内の中にいる者達すべての運命が，また戦っている兵士達の命がかかっていた。負ければ殺されるか，捕虜にされるかだった。兵士達は必死に敵に攻勢をしかけて戦い続けた。アクロポリスは，このように積極的に敵軍を攻撃し戦う事が出来る城塞だったのである。[37)]

丘の頂上にあったアガメノンの古代の宮殿の跡が，シュリーマンの発掘調査によって確認された。また宮殿に通じる現在も昔とおなじ場所に立っているライオン・ゲート抜きでは，ミケーネを語れない。城塞の正面大門は外門と内門とからなる二重の門になっていたが，現在残っ

ているのは外側のライオン・ゲートだけである。この門の構造は次のようになっていた。ライオン・ゲートは，両脇に長い大きな一本石を一本づつ柱にして立てた二本の脇柱の上に，長さ約5メートル，奥行き約1メートルの長い大きな横石を架け渡して，門の骨組みが構築されている。この横石の上に，表面を平らにした高さ約3メートルの大きな平石が縦に載せてある。この平石に刻まれている飾り模様の両側に，一頭ずつ向かい合っている二頭のライオンが，はっきりと彫刻されている。この彫刻は芸術的な傑作なので，外門はライオン・ゲートと呼ばれている。但し，残念な事に二頭とも頭部が欠落してしまっている。頭部は多分金属を使って作られていたらしい。[38)]



1967年11月著者撮影

「ライオン・ゲート」

1967年11月著者撮影

コリントにあるアポロ神殿の遺跡

紀元前約20世紀頃インドヨーロッパ人（Indo-Europeans）は，コリント地峡（the Isthmus of Corinth）によって中央ギリシア（Central Greece）と接しているペロポネッサス半島（Peloponnesian Peninsula）に移住し，更にコリント地峡を渡ってギリシア全土を制圧した。彼らはギリシア南部にあるペロポネッサス半島の各地に都市を創設して，この半島が将来発展する基盤を築いた。

ペロポネッサス半島には，古代ギリシアの歴史や文学によって，その名がよく知られている土地や都市が多い。これまでに述べて来たミケーネ文明の中心として栄えた，ミケーネも，その中の一つだった。また，コリント（Corinth）はアテネ滅亡後のギリシアで，最も大きな，最も豊かな都市国家として栄え，ギリシア周辺に多くの植民地を持っていた。半島南部のスパルタ（Sparta）は強力な軍事的都市国家として，紀元前

600－479年の間ギリシアの多くの都市国家を制圧していた。

ペロポネッサス半島にある各地の位置を知っておいた方が，理解の助けになると思われるので，まずペロポネッサス半島の簡単な地図から始めることにしよう。その中心を南北に延びているアルカディア（Arcadia）の山岳地帯を始めとして，ペロポネッサス半島は実に山岳地帯が多い所である。山々や丘の麓に田園地帯が広がっている美しい風景は，古代から人々の心を引きつけていた。特に羊飼いが牧羊しているアルカディア地方の平和な牧歌的風景は，セオクリタス（Theocritus）が「牧歌」（'Idylls'）の中で讃美して以来，西ヨーロッパ各国の詩歌の中で，理想的田園のシンボルとして詠い伝えられて来た。

このアルカディアの山岳地帯の西側に，古代ギリシア人が神々が宿る聖地とみなし，また，オリンピック競技発生の地となったオリンピア（Olympia）がある。ミケーネ文明の中心として栄えた城塞都市ミケーネは，アルカディア山岳地帯を挟んで，オリンピアと正反対の東側にある。ミケーネの南西に，インドヨーロッパ系のアキアン人（Achaean）が作った，古代アー

ギリシア地図

ゴリス（ancient Argolis）の都ティリンズ（Tyrins）がある。ティリンズの西北には，ミケーネを挟んでコリントがあり，南東にはエーゲ海西端の対岸にアテネ（Athens）がある。スパルタは，ティリンズから南下したペロポネッサス半島の南端中央部にある。ここでペロポネッサス半島のみならず，ギリシア全土を一時制圧していたスパルタの事を要約してから，ギリシアの城塞都市の発達という本筋に話題を移す事にしたい。

ギリシアの伝説によると，豪雄ヘラクリーズ（Heracles）の死後，彼の子供達はヘラクリーズの従弟と敵から迫害されて，ペロポネッサス半島から亡命した。彼らはコリント地峡を渡り，デルフィの神殿（Temple of Delphi）を通り過ぎ，更に北に旅を続けた。パルナッサスの山々（Mts. Parnassus）の北にドリス（Doris）という国があった。彼らは父ヘラクリーズの盟友だった，ドリス国王イージミアス（Aegimius）の助けを求めて，パルナッサスの山岳地帯を越えてドリスの国に入った。国王はヘラクリーズの子供達の苦境に同情して，彼らを温かく迎え入れてくれた。国王はヘラクリーズの息子ハイラス（Hyllus）を養子にして，自分の息子達とおなじように育ててくれた。それから三世代（トロイ戦争から80年）経過するうちに，ヘラクリーズの子孫は亡命した国のドーリア人（the Dorians）と完全に同化して，ドリスの北側にあったセサリー（Thessaly）を支配するようになった。ヘラクリーズの息子ハイラスの曾孫に当たる者達が中心となって，既に新しい国家が形づくられていたのかどうか不明であるが，ドーリア戦闘軍団を編成して，彼らの祖国奪回のため南下を開始し，コリント湾の東北のギリシア中央部にあるビオウシア（Boetia）を攻略した。これは紀元前12世紀の事だった。

ヘラクリッドの兄弟（Heraclid brothers）と呼ばれた，ハイラスの曾孫達はドーリア軍を率いて，ビオウシアからコリント湾を渡って，彼らの父祖の地ペロポネッサス半島に侵入した。ドーリア軍は紀元前12−8世紀にコリント地峡地帯に加えて，ペロポネッサス半島の東部と南部を占領した。アーゴス（Argos），コリント（Corinth）と，ミケーネ（Mycenae），ティリンズ（Tiryns）を初めとするアキアン人の国々（Achaean Kingdoms）などがドーリア軍の支配下に入った。ドーリア人は更にエーゲ海にも勢力圏を拡げて，紀元前8世紀までにクレタ島やロドス島などに植民地を作った。ヘラクリーズの子孫達は，ペロポネッサス半島の約3分の2を支配下に収めて，父祖の地に復帰する5代にわたる念願を達成して，錦を飾って故国に戻る事が出来た。彼らは半島南部中央の地を選んで，紀元前900年にスパルタを建設した。[39] ヘラクリーズの子孫達と彼らに協力したドーリア人が貴族階級になって，新国家スパルタを支配して指導に当たった。[40] 半島南東部のラコウニア（Laconia）と，南西部にあるメッシーニア（Messenia）は，どちらもスパルタの支配下に入った。ラコウニアはアルカディア同様に，山々が連なる牧歌的な地方だった。一方，肥沃な農作地帯だったメッシーナは，スパルタの農

奴制（helotry）の下で苦役を強いられて苦しんでいた。彼らが苦役から解放されたのは，スパルタに衰退の兆しが現われ初めた紀元前369年だった。

紀元前600年以降，ライカーガス（Lycurgus）指導の下で，スパルタに厳しい軍事政治が行われ，スパルタは強力な軍事国家となった。小アジアからペルシアの大軍が海陸から侵略を開始した時，ギリシア全土は存亡の危機に直面した。ペルシア戦争（Persian War 480−479 B.C.）中，スパルタ軍はギリシア連合軍の先頭に立って，勇敢に戦って，強大なペルシア軍を撃破した。ギリシアを国難から救った英雄の国として，スパルタの国威は高まった。それから約50年後に，ギリシア本土で日に日に勢力を高めて来たアテネ（Athens）とスパルタとの間に起こったペロポネッサス戦争（Peloponessian War 431−404 B.C.）で，スパルタはアテネを撃破して，全ギリシアに君臨するようになった。しかし，紀元前4世紀に，テーベ（Thebes）との戦いに破れたため，スパルタは衰退に向った。

ギリシア本土の中央に住んでいたドーリア人が紀元前12世紀頃からペロポネッサス半島に侵入して来た事により，これまでペロポネッサス半島の主要都市国家だったコリント，アーゴス，ミケーネ，ティリンズなどの旧勢力に代わって，ドーリア系のスパルタという新勢力が，半島の中心的国家となった時代の成り行きを見て来た。ここでまた，時代を古代ギリシアの歴史を紀元前4世紀から紀元前12世紀にまでさかのぼり，ミケーネを中心にして，ペロポネッサス半島で初まった高丘城塞都市国家の発達という問題に話題を移すことにしたい。

ティリンズ（Tiryns）は，アーゴスを間に挟んでミケーネの南東部にあった，アキアン人

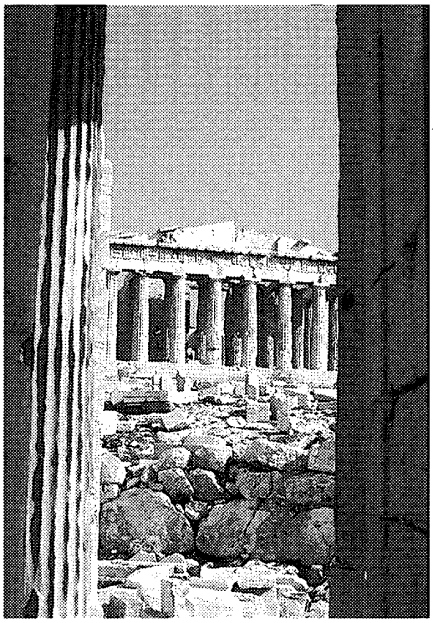
ティリンズのアクロポリス見取り図

(Achaens) が建設したアーゴリス王国 (Kingdoms of Argolis) の中心として，紀元前16世紀−9世紀頃栄えた高丘都市国家だった。防壁に囲まれた都市国家と伝えられていたティリンズの遺跡は，シュリーマンがミケーネとトロイの遺跡を発掘してから8年後に，彼の指導の下で発掘された事により，このアクロポリスの構成が明らかになった。ティリンズはおなじ頃，ミケーネとともに小アジアの影響を受けていたので，高丘城塞都市の構成や立地条件など，ミケーネと共通している点が多い。長方形の高い丘の頂上に築かれていたティリンズのアクロポリスは，山岳地帯の地形を利用して，ミケーネとおなじように，ギリシア神話に語られている片目の巨人キュクロプスの仕業のように，その間に小石を填め込んで巨岩巨石を一つ一つ組み合わせて積み上げて築かれた。ティリンズのアクロポリスは最初は約21メートルの厚さだったのが，現在は厚さ8.5メートルになっているどっしりとした重厚な防壁で，ぐるり囲まれていた。防衛線は岩山の縁に沿って張り巡らされていたが，ミケーネ程荒々しい感じではなかったそうである。紀元前10世紀か11世紀に改築されたと言われる，城の入口や宮殿は防壁同様にどっしりした石造建築になっていた。丘の上のアクロポリスと言われている高い丘の上にある，この都に近づく道は，両側の防壁の上で守備兵が厳重に守りを固めていた道が一本あるだけだった。

防壁の内部中央大広場に，円形の大きな塔のような石造りの建物が建っていた。この建物は王が住んでいた宮殿だったらしく，壁画や興味深い古代遺品の数々が，シュリーマンの発掘調査によって発見された。宮殿の内部に入る方法は唯一つ上げ降ろし式の梯子を利用する事だった。もし危険が迫っていると気付いたら，宮殿の中の者達が即座に梯子を巻き上げて取り外す仕掛けになっていた。宮殿の中には，人々が住んで生活出来るような部屋や守備兵達の屯所もあった。また籠城に備えて，武器弓矢その他の軍需品や食糧などを保存しておく倉庫があった。

古代ギリシア初期の文明や，ホーマーの叙事詩の世界を彷彿させるティリンズは今も残っている古代ギリシアの文化記念遺産として，感嘆の対象になっている。ギリシアの伝説によれば，ドーリア人が祖先と尊崇していたヘラクリーズは，長年ティリンズで暮らしていた，[42] と言われている。ミケーネとともにギリシア古代史にその名を留めたティリンズは，アーゴス (Aogos) の侵略を受けて紀元前468年に滅亡した。[41]

ペロポネッサス半島のミケーネとティリンズには，紀元前14世紀頃小アジア地方の影響を取り入れた，新しい形式の城塞が高い丘の上に築かれた。この城塞の中に神殿や宮殿や，行政機関の中心が移された。古代ギリシアの人々は，市や国の中枢機関が入っている，このような



1994年8月著者撮影
アテネアクロポリス

城塞をアクロポリス（**acro**, topmost, height + *polis*, city-state），言い換えると「高い丘の上にある城塞都市国家」と呼んでいた。[42] こうした新しい形式の城塞，つまりアクロポリスが，紀元前14世紀後半にミケーネが多くの衛星都市を従がえて国威が絶頂に達していた頃，ギリシア本土の多くの都市で造られ，広まっていった。アテネのアクロポリスは，ギリシアでこの頃造られたアクロポリスの一つだった。自然石を使った古代ギリシア最古の建築様式で築かれた，長さ20メートル以上もあるペラスジアンの長壁（Pelasgian Wall）は，パルテノン神殿入口の南に，今なおその侭残っている。[43]

アテネは紀元前7世紀までに，強力な都市国家になっていた。高い丘の頂上に築かれているアクロポリスは丘の麓に広がっている市街地に囲まれていた。紀元前480年頃，急斜面の丘の頂上に，そこだけが頂上に近寄れる側になっていた西側に神殿の入口を設けて，アクロポリスの周辺にぐるりと張り巡らされた一本の防壁が築かれた。おなじ頃，古い道路に面した部分に出入口を設けた，もう一本の防壁が，下に広がっている市街地一帯を囲み込んで作られた。下の市街地に通じる大通りに作られていた，トラキア門（The Thracian Gate）と呼ばれた通用門は，紀元前350年頃作り直されて，ディピロン・ゲート（The Dipylon Gate），つまり二重の門（Double Gate）という名に呼び変えられた。外側の門と内側の門とから出来ている二つの門の中間に作られた，通路兼用の広いこの空間の両端に，一対の塔が築かれていた。外門と内門の両脇はこの二つの塔で守りを固められ，広い空間の両側は厚い防壁で取り囲まれていた。急斜面の坂道を上がって漸く外門に攻め込んだ敵軍は，内門で進路を阻止され，内と外との二つの門の間にある空間の全面を取り囲んでいる防壁の上から，塔の上から，城の守備隊が注ぎ込む矢や投げ槍などの集中攻撃の目標にされた。[44]

防御施設がこのように強化改善された頃，アテネはスパルタ軍がいつペロポネッサス半島から攻撃して来るか判らない，という脅威に晒されていた。防衛力強化を急遽進める必要に迫られていたアテネが参考にしたのは，ミケーネのアクロポリにあった，ライオン・ゲートを中心とした防衛線の建設構造だった。ミケーネ，ティリンズ，アテネのアクロポリスの防衛に重要な役目を果たした軍事施設の一つとして，塔は敵軍の動きを見守り，また味方陣地に信号を送る通信機関として利用された。このため，ギリシア本土や，エーゲ海の緒島，小アジア地方で

は，一定の間隔を置いて塔を配置した防壁や城塞が，長い間築かれていた。こうして築かれた城塞都市やアクロポリスは，すべて，いつ起こるかも知れない戦争に備えて，主権者の威光を確保するために利用された。紀元前13世紀に，ギリシア本土中央部からペロポネッサス半島にドーリア人が移動して以来，彼らの脅威にいつも脅かされていたミケーネ，ティリンズ，アテネなどの都市国家は，防衛強力化に努めていた。[45] しかし，これらの都市国家のうちミケーネとティリンズはいずれも，ドーリア人の血筋に連なるスパルタの侵略を受けて滅亡した。残るアテネの方は紀元前5世紀に，ペリクリーズ（Pericles）指導の下で黄金期を迎え，ペルシアに備えて海軍力を増強し，ギリシア都市国家大同盟（a large confedaracy of Greek States）の指導国家となった。ペリクリーズの時代に，音楽と古典劇を初めとして，芸術は全盛期に達し，エースキラス（Aeschylus）ソホクリーズ（Sophocles），ユーリピティーズ（Euripides），アリストファネス（Aristophanes），ソクラテス（Socrates）などの天才的古典劇作家や優れた哲学者が輩出した。やがて軍事強国スパルタと文化国家アテネとの間に対立が生じ，アテネはスパルタと長期戦を戦っていたが，遂に第2次ペロポネッサス戦争に破れた。その後，アテネはギリシア北辺の国マケドニアの天才戦術家フィリップ二世（アレクサンダー大王の実父）との戦いに破れてから，衰退の一路を辿り続けて，146年にローマの属領となった。

こうして，主権はギリシアからローマに移り，歴史は大きな転換期を迎えた。

註

1) 伊東好次郎「イギリス人とイギリスの庭園（Ⅱ）」，『川村学園女子大学紀要』13巻1号，P. 44.
2) Toy, Sidney, *Castles; Their Construction and History*, P. 2, P. 11.
3) **babel** [Heb. *bābel*, Assyrian-Babylonian, *Bab-ilu*, Babylon (Gate of God).] *Longmans English Larouse*, P. 84.
4) *The Century Cyclopedia of Names*, P. 601.
5) Tuulse, Armin, *Castles of the Western World*, P. 7.
6) **Babylon** The ancient capital of Babylonia, now ruins, on the Euphrates, 55 miles south of Baghdad, probably founded C.4000 B.C.. *Longmans English Larousse*, P. 84. *The Century Cyclopedia of Names*, P. 105.
7) Toy, Sidney, *op. cit.*, P.2.
8) Featherstone, Donald, *Warriers and Warfare in Ancient and Medieval Times*, P. 37.
9) Toy, Sidney, *op. cit.*, P. 11.
10) Herzog, Chaim and Gichon, Modechai, *Battles of the Bibles*, P. 259.
11) Tuulse, Armin, *op. cit.*, P. 7.
12) Herzog, Chain and Gichon, Mordechai, *op. cit.*, P. 220.
13) Tuulse, Armin, *op. cit.*, PP. 7−8.
14) Freeman, Charles, *The Greek Achievement*, P. 324.
15) Toy, Sidney, *op. cit.*, P. 11.

16) Herzog, Chain and Gichon, Mordechai, *op. cit.*, PP. 47－48.
17) Donnelly, Mark P. and Diehl, Daniel, *Siege; Castles at War*, P. 6.
18) Tuulse, Armin, *op. cit.*, P. 9.
19) Toy, Sidney, *op. cit.*, P. 10.
20) Tuulse, Armin, *op. cit.*, P. 7.
21) Toy, Sidney, *op. cit.*, P. 10.
22) Toy, Sidney, *op. cit.*, PP. 8－9.
23) Toulse, Armin, *op. cit.*, P. 7.
24) Donnelly, Mark P. and Diehl, Daniel, *op. cit.*, P. 6.
25) Tuulse, Armin, *op. cit.*, PP. 8－9.
26) Tuulse, Armin, *op. cit.*, PP. 9－10. Toy, Sidney, *op. cit.*, PP. 5－6. Donnelly, Mark P. and Diehl, Daniel, *op. cit.*, P. 6.
27) Tuulse, Armin, *op. cit.*, PP. 9－10. Toy, Sidney, *op. cit.*, P. 5.
28) Tuulse, Armin, *op. cit.*, P. 10.
29) Tuulse, Armin, *op. cit.*, P. 10.
30) Toy, Sidney, *op. cit.*, PP. 12－13.
31) D'Epiro, Peter and Pinkowish, Mary Desmond, *What are the Seven Wonders?*, PP. 150－151.
32) Freeman, Charles, *op. cit.*, PP.25－27.
33) Tuulse, Armin, *op. cit.*, P. 10. Toy, Sidney, *op. cit.*, P. 5.
34) Tuulse, Armin, *op. cit.*, P. 12.
35) Toy, Sidney, *op. cit.*, P. 1.
36) Tuulse, Armin, *op. cit.*, P. 10.
37) Toy, Sidney, *op. cit.*, P. 2. Tuulse, Armin, *op. cit.*, P. 10.
38) Toy, Sidney, *op. cit.*, P. 2.
39) Freeman, Charles, *op. cit.*, P. 35.
40) Preece, Warren E. editor in chief and Others ed., *Encyclopaedia Britania*, vol. Ⅶ, P. 594.
41) Preece, Warren E. editor in chief and Others, *Encyclopaedia Britania*, Vol. X X Ⅱ, P. 21. Toy, Sidney, *op. cit.*, PP. 3－5. Tuulse, Armin, PP. 11－12.
42) **acropolis** In Greek literally "city at the top," is the general name in ancient Greek history for citadels built on elevated easily defensible sites and usually forming the nuclei of large cities. By extention it can be applied to any such citadels, even outside Greek history. In several ancient Greek cities the acropolis survived, the most famous being that of Athens. See Athens; Argos, Corinth; The Thebes (Greece). Preece, Warren E. editor in chief and Others ed., *Encyclopaedia Britanica* Vol. Ⅰ. P. 109.
43) Tuulse, Armin, *op. cit.*, P. 12. Preece, Warren E. editor in chief and Others ed., *Encyclopaedia Britanica*, Vol. Ⅱ, PP. 673－674.
44) Toy, Sidney, *op. cit.*, PP. 11－12.
45) Tuulse, Armin, *op. cit.*, P.12.

参考文献

D'Epiro, Peter & Pinkowish, Mary Desmond, *What are the Seven Wonders of the World?*, Metro Books, London, Great Britain, 1999.

Donnelly, Mark P. and Diehl Daniel, *Siege; Castles at War*, Taylor Publishing Company, Texas, USA, 1998.

Featherstone, Donald, *Warriors and Warfare in Ancient and Medieval Times*, Constable and Company Limited, London, Great Britain, 1997.

Freeman, Charles, *The Greek Achievement*, The Penguin Press, London, Great Britain, 1999.

Herzog, Chaim and Gichon, Mordechai, *Battles of the Bible*, Greenhill Books, Lionel Leventhal Limited, London, Great Britain, 1997.

伊東好次郎「イギリス人とイギリスの庭園（II）」『川村学園女子大学紀要』13巻1号　2002.

Roberts, J. M., *Eastern Asia and Classical Greece*, Duncan Baird Publishers, London, England, 1998.

Shipley, Graham, *The Greek World after Alexander*, Routledge, London, Great Britain, 2000.

Toy, Sidney, *Castles: Their Construction and History*, Dover Publications, Inc., USA, 1984.

Tuulse, Armin, *Castles of the Western World*, Dover Publications, Inc., New York, USA, 2002.

Warner, Philip, *Sieges of the Middle Ages*, Penguin Books, London, England, 2000.

Wood, Michael, *In the Footsteps of Alexander the Great*, University of California Press, Berkeley, USA, 1997.

聖書と参考事典

The Holy Bible, King James Version, The World Publishing Company, Cleveland and New York, USA.

Preece, Warren E. editor in chief and Others ed., *Encyclopedia Britanica*, vols., I, II, VII, Encyclopedia Britanica, Inc., William Benton, Publisher, UK, USA, Switzerland, Australia, Japan, Singapore, 1968.

Smith, Benjamin, E. ed., *The Century Cyclopedia of Names* The Century Co., New York, USA, 1914.

Watson, O. C. ed., *Longmans English Larousse*, Longmans, Green and Co. Limited, UK, 1968.